

凡 例

1. 本書は戦前の台湾総督府が1931年、1932年に発行した《臺日大辭典》の上下巻を現代の言語習慣に合わせて抜本的に改編したものである。原作の風貌を忠実に再現することを前提としているが、障害となっている仮名式の台湾語発音表記をローマ字に変え、対訳の日本語も戦前の旧文体(旧漢字や仮名遣いなど)を全面的に現代日本語に書き換えた。明らかに間違っただけ編者の独断で手を加えた。
2. 台湾各地における発音の差異は多様であるが、原作《臺日大辭典》では便宜的に廈門音を基準にし、ほかに漳州、泉州などの発音をも多数収録してある。本書は原作を踏襲する。
3. 本書は原作に収録される台湾語の見出し語 81,981 語¹を完全収録する上、新たに 888 語を追加した。全書 82,869 語のうち単音節語 6,680 語があり、46,000 文近くの例文を含み、総文字数は 450 万字を超える。なお、原作の収録語と区分けするために増補した新語にはすべて記号を附した。
4. 見出し語のすぐ後に“**ㄅ**”が記されている場合、その単語は編者により追加されたものである。なお、編者が追加した例文、対訳などに“**ㄅ**”を冠し、その後の文字は編者が増補したことを表す。例えば：

chui² to⁷ chui² 水道水* **ㄅ** 水道水。……………(全体が増補)
tam³ thau⁵ 頓頭* ①頭を下げる。俯く。②**ㄅ**頷く。了承、許可する。……………(②は増補)
au⁷ kha¹ 後脚* 後ろ足。**ㄅ**※扭～～khiu² au⁷ kha¹=足を引っ張る。……………(例文は増補)

5. 台湾語の漢字表記は原作を尊重するが、現代語の習慣に合致する漢字がある場合に限り改める。適切な漢字がない場合、“□”を代替として用いる。
6. 台湾語の詳細な音韻解説は省略するが、本書が用いるローマ字発音記号の詳細は表紙裏の「音節一覧表」を参照。見出し語の配列はアルファベット順に準じるが、鼻韻(-ⁿ)は非鼻韻の後に次ぐ。なお、全音節の並べ順は「音節索引表」を参照。
7. 参考に本書の発音表記と、台湾の教育部が推薦した TLPA 式表記と教会ローマ字式表記との相違を次表にまとめた(網がけの部分は本書と一致する)：

	破擦音	鼻母音	介音	[ɔ]	[in]	[iek]	[ien]/[iet]	[iɔ̃](漳浦)	[ə](泉州)	[i](泉州)
本書	ch/chh	- ⁿ /-h ⁿ	-u-	ou	ing	iek	ien/iet	iou ⁿ	r	w
TLPA	c/ch	-nn/-nnh	-u-	oo	ing	ik	ian/iat	ioonn	er	ir
教会ローマ	ch/chh	- ⁿ /-h ⁿ	-o-	o'	eng	ek	ian/iat			

¹ 原作「臺日大辭典」の凡例に「九万余語を収録した」と記してあるが、誤りである。

8. 音節の末尾に番号をもって台湾語の声調(本調)を下表のように表示する:

声調記号	1	2	3	4	5	7	8
固有名称	陰平	上声	陰去	陰入	陽平	陽去	陽入
調形	高平調	降下調	低平調	低促調	上升調	中平調	高促調
本調調値	55	51	11	2	214	33	4
変調調値	33	55	51	(-p,t,k) 4 (-h) 51	33/11	11	(-p,t,k) 2 (-h) 33

9. 声調の変化が複雑なので参考に音節の間に変調を示す補助記号を加えた。“/”は記号前の音節が変調しないことを表す。“:”は記号後の音節が轻声で発音され前の音節は本来の声調で発音する。特別に記号がなければ最後の音節は本調で発音する。ただし、これらの変調は原則的なもので、語調及び個人差によっては一致しない場合もある。例文においては“/”を省略する。例えば:

iⁿ⁵ : laŋ⁵ ue⁷ piⁿ² / piⁿ² : laŋ⁵ ue⁷ iⁿ⁵ 圓人能扁扁人能圓

ka¹ ki⁷ : e⁵ bou⁷ / pat⁸ laŋ⁵ : e⁵ bou² 自己的墓別人的妻

kha¹ / ta⁸ laŋ⁵ : e⁵ tue⁷ 脚踏人的地

kong² / kau³ : hia¹ kiaⁿ⁵ / kau³ : hia¹ 講到彼行到彼

(下線の音節は本調で、点線の音節は轻声で、その他は変調で発音する。)

10. 対訳の文中、日本語に当てはまる言葉がなく台湾語をそのまま引用するときに“【】”を用いて区別をする。その台湾語を再引きして参照することをすすめる。尚、見出し語の同義語は“⇨【】”で示す。

11. 例文においては“~”を用いて見出し語の漢字に置き換える。ただし、例文の発音は将来性を考慮して全文を表記する。

12. 一般学習者の便利を図って、編者の語感で見出し語の漢字の右肩に“+”を追加して、現在台湾における常用語彙を示す。計 21,000 語余。(1932 年に台湾総督府は《臺日大辭典》の縮小版《臺日小辭典》を編集した。当時における常用語彙約 22,100 語を収録したが、本書とのずれが相当大きい。)

13. 厦門音以外の訛りを以下のような記号で表す:

(漳)=漳州 (泉)=泉州 (浦)=漳浦 (同)=同安 (安)=安溪 (灌)=灌口 (長)=長泰

14. 語彙の分類は以下のような記号で表す:

㊦=文語 ㊧=地名 ㊨=卑語 ㊩=姓名 ㊪=疾病 ㊫=新語ⁱⁱ ㊬=鉱物

㊭=動物 ㊮=植物 ㊯=罵語 ㊰=薬物 ㊱=戯語 ㊲=日本語による外来語

ⁱⁱ 原作が編纂された当初に付けた記号であるが、語源探求に役立つためそのまま引用する。

15. 校正に当っては個人最大の努力を尽くしたが、なお多くの誤字や脱字が存在していると思われる。今後、個人のサイトを通じて永続的に本書の正誤表を随時更新し読者に提供する。アドレスは <http://www32.ocn.ne.jp/~sunliong/tai-jit.htm> であるが、何時か変更する可能性が高いので、サーチエンジンから「新編台日大辞典」で検索することをすすめる。又、読者の意見や正誤なども同ウェブサイトを紹介して承る。或いは巻末の附表に記入し編者に郵送する。
16. 原作《臺日大辞典》の編修は元台北帝国大学教授小川尚義が編集長を務め、平澤平七と岩崎敬太郎が材料の収集や訳語の作成を担当した。さらに、インフォーマントとして多くの台湾人も計画に加わった。対して、本書の修訂には松添節也氏、圓本武喜氏、新村俊雄氏及び三浦久仁子氏の協力を得て対訳の現代語化に尽力した。だが、諸般の言語事情で原作の対訳にはなお極少数ではあるが、戦前使用されていたと思われる不可解な表現があり、今回はやむを得ず原文をそのまま保留することにした。
17. 日本語の発音を借用した外来語について、原則的に最後の音節が轻声と読み、その前の音節が高平調で発音するのがもっとも一般的であるが、その他のパターンもある。本書では台湾語の変調規則に準じて次のように記述する：

さしみ=**sa¹ si¹ : mi¹** バス=**ba¹ : su¹** 盛り場=**sa¹ kha¹ / li¹ : pa¹**
 トラック=**tho¹ la¹ : khu¹** ビール=**bi² : lu¹** クリーム=**khu¹ lim² : mu¹**
 コンクリート=**kong³ ku¹ li²** 又は **khong² ku¹ li²**